

2008. 1. 31

佐川克弘

「乙訓地区・平成大水害」の原因

「乙訓地区・平成大水害」と言っても洪水で河川の堤防が破堤したのではありません。それは京都府営水道による水道水の押し売りにより、大山崎町・向日市・長岡京市がアップアップして被害を被っているのです。始末が悪いのは、この水道水による浸水は何時引くか見通しが立っていないことです。

それでは何故乙訓地区でこのように水余りになったのでしょうか。簡単に京都府の日吉ダム利水の歴史を振り返ってみます。

(1) 1970年代 = 工業用水・生活用水2本建で計画、つまり

工業用水 → 府営水道が企業へ直接給水

生活用水（上水） → 自治体が受水し、水道水として住民に供給

(2) 1980年代 = 2本建では建設コストが高くなるため、生活用水に1本化、つまり

生活用水 → 自治体が受水し、①企業には（工業用水の代わりに）生活用水を供給
②水道水として住民に供給

なお計画水量は、工業用水 = 25,550 m³/日

生活用水 = 43,250

合計 = 68,800

(3) 1990年代 = 給水能力46,000 m³/日にて乙訓浄水場の建設開始。

(4) 2000年10月乙訓浄水場、2市1町に給水開始。

乙訓地区の膨大な水余りの原因は（もちろん生活用水についても過大な需要予測も一因であるが）何よりも工業用水・生活用水2本建を生活用水に1本化したことにあります。

1 m³当たり概ね20円程度で地下水を利用している企業が、1桁以上高い水道水に切り替えてくれるでしょうか。シブシブ切り替えて協力してくれた企業もありますが、それはあくまで例外です。乙訓の住民は元来府営水道が企業に供給すべき水まで押し売りされているのです。飲んでも飲んでも飲みきれない水は、宇治など乙訓以外でも引き受けてもらう以外に解決しないと考えられます。